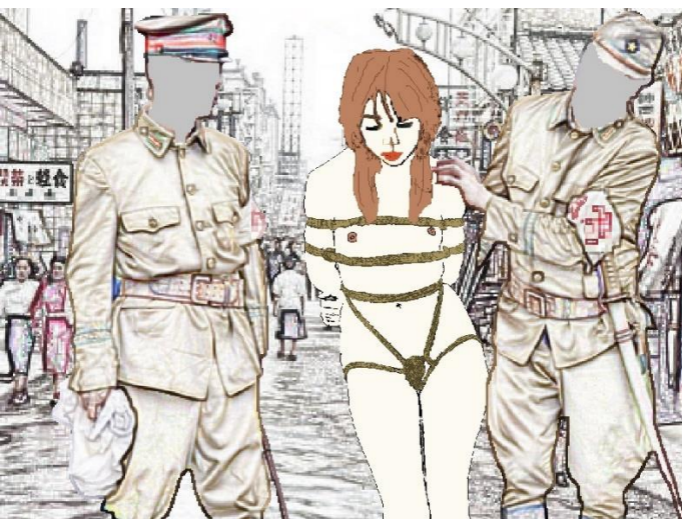


非国民の烙印～日独混血少女の受虐

後編：母娘への凄惨な拷問



濠門長恭

後書	S I D E .. B	S I D E .. A	9 ..	8 ..	7 ..	6 ..	5 ..	4 ..	3 ..	2 ..	1 ..	前編の粗筋	目次
			海軍病院	淫唇縫合	十一人	全裸護送	極限拷問	冤罪甘受	娼売披露	母娘対面	特高警察	:	
										一八	七	三	

前編の粗筋

名誉の戦死を遂げた海軍大佐を父に、ドイツ貴族令嬢を母に持つ中尾栄子（国民学校上級科二年生）は、空襲で焼け出されて、伯父の家に母子ともども身を寄せていた。肌の色が鬼畜米英と同じ栄子は、いわれなき差別をはね返すためにも高慢に振る舞い、周囲も彼女を敬して遠ざけていた。

しかしドイツの敗戦とともに、母娘は奈落の底に突き落とされる。母に横恋慕して肘鉄を食わされていた特高警察の沼野刑事は、スパイ容疑をでっちあげて彼女を逮捕した。

栄子は精神的ショックで予定外の生理を迎え、それがきっかけとなつてずるずると勤労奉仕を怠けてしまった。

教頭の林は栄子を学校へ連れ出し、他の生徒たちの前で彼女を全裸に剥いて、少国民精神注入棒とうそぶいている竹刀で「じか叩き」

を加える。さらに、大和魂を身体の芯に染みこませると称して結び玉付きの褌を締めさせ、白い肌を灼いてまわりに同化させるという口実で、一切の着衣を禁じた。

裸で往来を歩く栄子を見咎めた巡査も、実は林と示し合わせていた。淫毛が無ければ大人ではないから裸でも猥褻にはならないと屁理屈をつけて、交番の奥で栄子を剃毛してしまふ。

退学したいという栄子の訴えは、世間体を気にする伯父に退けられた。母の無実さえ証明されれば、非国民呼ばわりもなくなると思つて、栄子は恥辱にまみれながらも褌一本の裸体で通学するのだが。

スパイの娘を嫁にする男はいないし、就職もできっこない。だから、おまえにふさわしい職業教育をしてやると——林は仲間の教師と語らつて栄子を輪姦し、さまざまな性技を教え込み、娼婦に仕立てようとする。当時は娼婦でも心を通わせた相手にしか許さない吸茎も、当然のように強制した。

そういう事実を知つた伯父は、さすがに近親姦は憚つて栄子の

もうひとつの処女を奪った。その現場を伯母に目撃されて栄子は母屋から追い出され、物置小屋での寝起きを強いらられ、食事も伯父が「好意」で差し入れてくれる残飯だけとなった。巡査や伯父までも巻き込んで、露見すれば自身の破滅につながるまでの無茶苦茶をする林は、極限の自棄に陥っていたのだ。どうせ近いうちに、一億総特攻で全国民が死に絶える。好き勝手が出来るのは今だけだ、と。

林の本音を耳にして、栄子は義憤に駆られる。しかし、高潔な正義感ゆえの抗議も、全校生徒の目の前で、苛酷な懲罰をおこなわれては、しおらしく謝るしかなかった。

懲罰の代わりとして、栄子は連日の実習教育を受けさせられた。つまり、場末の娼婦よりも安い金で客を取らされるのだ。その中には同級生の父兄や栄子を剃毛した巡査たちもいたし、伯父までもいた。

実物の戦車を持ち込んで行なわれた肉弾特攻の訓練では、栄子は

裸のまま戦車の下へ飛び込まされて失敗し、気合が足らんとばかりに、荒縄禰で地雷を引っ張って運動場を一周させられもした。性的虐待を耐え忍ぶ栄子だった。母が無事に帰って来ることに一縷の希望を託して

1…特高警察

さらに五日が過ぎて月が替わった。擦り傷はとつくに消えて、皮のめくれた乳房は、驚づかみにされても（激痛に馴らされた栄子なら）悲鳴をあげずにすむくらいにまでは治っていた。そうして。生き地獄だと思っていた今の境遇が恋しくなるほどの凄絶な被虐が、幕を開けるのだった。午前中の日課の便所掃除を始めてすぐに、どかどかと廊下を踏み鳴らして近づいてくる足音があった。

（………？）

おとなの足音だが、教師は生徒たちの範たるべく静かに歩く。誰だろうと思う間もなく。

「中尾栄子だな」

制服の巡査を後ろに従えた背広姿の男が便所に踏み込んできて、

わかりきったことを尋ねる。

栄子も、この男の顔を見間違えるはずがない。母を逮捕した特高警察の沼野刑事だった。

「母に、なにかあったのですか？」

「あり得ないとは思いますが、もしかすると母が釈放されるのではないかと一縷の希望を抱く。」

「ん？ ああ、あのスパイ女には」

沼野は意味ありげに薄く嗤った。

「いろいろあったが……今日は、おまえに用事があって来たのだ」

そこで、沼野は形を改めた。

「中尾栄子。スパイ幫助容疑で逮捕する」

「え……？」

数瞬、栄子はぼかんとしていた。ホウジョという言葉の意味が、すぐには頭に浮かばなかつた。しかし、言葉の枝葉には関係なく、自分が逮捕されるらしいとはわかつた。

「なぜ、わたしを逮捕されるんですか。母もわたしも、スパイなんかじゃありません」

「取り調べればわかることだ」

沼野は、ベルトに吊っていた捕縄を引き抜いた。栄子に組みついたりはしない。取り押さえる猿芝居で肌を露出させる必要がないからだ。

沼野は栄子を後ろ向きにさせて、手首をつかんだ。

「待ってください。どういふことか説明してください」

栄子は沼野の手を振りほどこうとした。が、逆に強い力で背中にねじ上げられた。

「やめてください。警察へ来いと言うのなら、おとなしくついて行きます。やだ：：縛らないで」

峰子のときと同じように、沼野は手首を縛った縄を首に巻いて、さらに手首を吊り上げた。

さんざんに強姦され輪姦されてきた栄子だったが、後ろ手に縛ら

れたのは一度きりだった。そのときには、自分の禪を使われたのだ
が——縄による緊縛は厳しさがまるで違っていた。縄を緩めようと
手首を動かすと、かえってきつく締まっていく。

しかも、腕を水平よりも高く吊り上げられるなんて初めてだった。
単に自由を奪われたというだけではない。縛られて抵抗を封じられ
て、これから何をされるのかと怯える以前に——緊縛そのものが、
肉体と精神に加えられる拷問だった。

「逮捕のときは捕縛するのが決まりだ。抵抗すれば、公務執行妨害
の罪も加わるぞ」
「抵抗なんかしてません」

そこまで言つて。あつと、栄子は思い当つた。

母が逮捕されたのは、冤罪というよりも、横恋慕のあげくに振ら
れた沼野の、個人的な意趣返しだ。坊主憎けりや袈裟まで憎いとい
うけれど——私まで虐めるつもりなのだと、栄子は悟つた。
特高の取り調べで障害を負つた人の噂を聞かないでもない。それ

ほどの拷問に、さらに私怨が加われれば……膝が震えて、栄子は崩れ落ちかけた。が、首縄の後ろをつかんで引っ立てられた。

「うく……」

息が詰まって、いやでも栄子はまっすぐに立って、縄で吊り上げられて、母が逮捕されたときは、特高警察が拷問をするとは知っていた。でも、殴る蹴るよりもひどい拷問があるなんて想像もできなかった。しかし今の栄子は、体罰も職業教育も肉弾特攻も体験させられている。拷問はそれよりも残酷なのだろうと、容易に想像できた。

沼野は禪のすぐ上に腰縄を打った。縄尻をそのまま前へは引かず、禪の前に絡めて、下から上へ腰縄にくぐらせた。

「よし、歩け」

沼野が先に立って腰縄を引いた。禪が細くよじられて引き上げられる。そのぶん、結び玉がきつく割れ目に食い込む。

「く……」

それでも栄子は、脚に力を入れて踏みとどまろうとした。あまりに理不尽な仕打ちだと、栄子は屈辱よりも怒りを感じていた。全裸に剥かれて林に竹刀で叩かれたときは、勤労奉仕を怠けたという負い目があった。屈辱的な文言を自分の手で彫らされた木札を提げて禪一本で外を歩かされたときも、母がスパイだという誤解が発端なのだから、汚名が雪がれるまでは耐え忍ばなければならぬという思いもあった。

盗人にも一分の理ではないけれど。娼婦教育でさえ、自分を納得させる理屈は、まったく無かったわけではない。男たちの性欲への生贄にされたとはわかっていても――嫁の貰い手などないし、まともな職業にも就けないという林の言葉は間違っていない。

（こんなやつ、沼野の所業にはひとかけらの正当性もなかった。しかし、そんな憤りも。さっさと歩かんか！）

サーベルの鞘で尻を（わざわざ尻の谷間を縦に）叩かれ、もうひとりの巡査に乳房をつかまれて前へ引っ張られては、足を踏み出すしかなかった。

便所の外には林と、急遽呼び出されて駆けつけたらしい汗みずくの校長とが並んでいた。
「お役目ご苦労様です」

苦虫を噛みつぶしたような顔に愛想笑いを貼り付けて、林が会釈とも言えないほどわずかに頭を下げた。彼にしてみれば、いびつな性欲のはけ口と小遣い稼ぎの種（淫売代金の半分を栄子にやると言いながら、実はすべて自分の費えに宛てていた）をかつさらわれるのだから、面白いはずもない。
「うむ」

沼野はそれなりに答礼してから。

「先生は、もつとご自身の手で指導を続けたかったのでしょうな」
同じ穴の貉だけあって、林の無念など見透かしている。

「非国民とまではいかなくても、それに近い娘など、いくらでもないのではないですかね」
「そんなことはありません。本校の生徒は、熱烈な愛国者ばかりです」

校長があわてて言葉を返す。

「そのとおりです。わたくしが、ちゃんと目を光らせております」
校長を除け者にして、林と沼野が目を合わせた。

「では、この娘は、ただいまして行きます」
警官の職務遂行にしては奇妙な言い方だが、すくなくとも校長は気づかないようだった。

「はい、なにとぞよろしく願います」

しかし栄子は、沼野の目論見を正しく理解して、いつその怒りと恐怖とに身体を震わせた。

（負けるものですか！）

不意に、心の奥に固い決意が生まれた。

今度こそ、自分には一点の非もない。裸で外を引き回されて恥辱にまみれ、処女ばかりか肉体のあらゆる純潔を奪われ、ほんもの娼婦よりも淫らな真似までさせられて……けれど、それは、こんな男に嬲られる理由にはならない。相手の警察なのだから。自分の所業は何もかも筒抜けになつているだらう。もしかすると、この男にまで犯されるかもしれない。そんなことくらい、もう平気だ。どれだけ肉体を穢されようと、心まで穢されるわけではない。

（でも、心の純潔って……なんだろう？）

腰縄を引かれ乳房を引っ張られて歩きながら、ふっと栄子は疑問を覚えた。

答えは、すぐには見つからなかった。それでも。「胸をつかまれていると歩きにくいです。手をはなしてください」

凜とした物言いに、巡査が反射的に手を引つ込めた。が、沼野も足を栄子は大腿に歩いて、引き縄を緩めようとした。

速める。このままでは駆けっこになってしまふと気づいて、栄子は歩幅を小さくした。縄に引っ張られて歩く形に戻って、股間への刺激が強まった。

どうということはない。膝を高く蹴り上げて歩くよりは楽だった。それでも、歩き続けるうちに快感が忍び寄ってくる。

(こんな苦痛にまで馴らされてしまった)

苦痛という言葉に、自分でぎよっとした。

スパイ幫助の罪を認めるまで、自分は拷問にかけられるかもしれない。いや、きっと拷問される。

股間を縦に打たれたり、荒縄の毛羽でこすられる以上の苦痛を、栄子はまだ知らない。けれど、このふたつは体罰とか訓練の名目で施された折檻だ。

ほんものの拷問は、もっとずっと苛酷なのだろう。それに耐えて、嘘の自白なんかしない——それが、心の純潔なのだと、栄子は悲壮な覚悟を固めた。

栄子は、答えを見つけたと思った。しかしその答えは、いっそう苛激な拷問を呼ぶと、それくらいは栄子にもわかる。(でも、負けない！　どんな理不尽なことをされても、わたしは耐えてみせる)

栄子は、しゃんと胸を張った。

禪一本の裸身に縄を掛けられていても。ドイツ処女同盟団の制服に身を包んでいるかのように、栄子は堂々と――新たな被虐の場へ向かって歩むのだった。

校門を出たところで、栄子は恥ずかしさよりも恐ろしさよりも、いっそう強く心細さを感じた。これまででは、先頭に立たされるとはいえ、十人ちかい男子生徒に取り囲まれていた。けれど今は、沼野と巡査の三人だけ。ひどく無防備に感じられた。

無防備といえ。こんなふうには縛られて歩くのは、初めての体験だった。つまずいて（それとも、股間の刺激に朦朧となって）転びかけても、体勢を立て直すのがむずかしい。ほんとうに転べば、手を突いて身体をかばうこともできない。

歩くことそのものは、そんなにつらくない。早足歩調ではないし、膝を水平まで蹴り上げなくてもいい。股間への刺激は、ずっと穏やかだった。

けれども。縄を打たれて警察にしょつ引かれるというのは、この

うえもない恥辱だった。まったくの濡れ衣どころか、沼野の私怨なのだ。

(こいつも、林も……卑劣漢ばかりだわ)

股間への刺激が弱くて冷静でいられるぶんだけ、栄子は怒りをつのらせた。

しかし、怒りは長くつづかない。不安と恐怖が、だんだん心の奥底まで浸透してくる。

スパイ幫助容疑と、沼野は言った。母が、自分はスパイだったと認めたのだろうか。もしそうだとしたら、竹刀や荒縄なんかとは比べものにならない拷問に屈したのだろうか。

母は強い人だ。伯父にはいろいろと遠慮していたけれど、婦人会なんかでも控え目にしていたそうだけれど——父が戦死したとき、母は人前で涙を流した。心が弱い女性なら、むしろ夫の忠勇報国を誇りに思うとかなんとか、世間受けのする態度を取り繕っただろう。そしてなによりも。心が弱ければ、家族も国も捨てて、愛する人を

追って地球の裏側まで来るなんてできない——と、栄子は思う。

（わたしは、父様と母様の娘なんだ）

どんな辱めを受けようと、毅然と振る舞って見せる。あらためて心に誓う栄子だった。

家から学校までは歩いて十五分。その倍を歩かされて、ようやく三階建ての警察署が見えてきたところで、沼野は右へ折れた。

特別高等警察といっても、専用の建物があるわけではない。それぞれの警察署に刑事課や生活課があるのとはすこし事情が違うが、大きな警察署の一部を間借りしている。だから、沼野が道を変えたのは不可解だった。

「警察署とは方角が違います」

不安と不審とで、栄子は沼野の背に声をかけた。

「まだ時間はある。街を歩くのは、これが最後だ。たっぷり散策さ

せてやる」

「……」

栄子にも無実の罪を認めさせて、無罪放免などしないという意味だ。と同時に、あちこち引き回して栄子を辱めるつもりなのだ。(いったい……わたしは、この人に憎まれるような何をしたんだらう?)

母親への恨みとは関係なく、若い女を甚振ることに昏い悦びを得る男が存在するとまでは、付け焼刃の娼婦経験しかない栄子には、理解できるはずもなかった。

一時間ちかくも引き回されてから、警察署の門をくぐったとき、栄子は脚が引き攣りそうになっていた。手でバランスを取らずに歩くのは、それほどきついのだった。

沼野が上司への報告やら収監手続やらをするあいだ、栄子は二人の巡査に挟まれて待合室の隅に立たされ、ここでも晒し者にされた。往來とは違って、栄子と他人との距離はずっと近い。諸手続に訪れた者、相談に来た者、呼び出された者。男たちはできるだけ栄子の近くの椅子にすわり、婦人たちはできるだけ遠ざかるか、これ見

よがしに待合室から出て行く者もいた。
針の筵に座らされるといふが、栄子にしてみれば、全身に針を突き立てられる思いだった。

三十分ほどもしてから、ようやく署の奥へ引き入れられた。
一階は窓口と事務室、二階の部屋はすべてドアが閉じていた。ドアの上の木札から、事務室と会議室と幹部の執務室になっているのがわかるが、栄子にはまわりを観察する余裕などない。三階が留置場と取調室だった。

廊下の両側が留置場。正面は鉄格子で、一人あるいは数人が収容されている。長く留置されて、この三週間の出来事を知らない者は、男も女も目を見開き口をぽかんと開けて、若い娘が裸身で通り過ぎるのを見送っていた。事情を知っている男は、眼福とばかりに、鉄格子にかじりついていてる。

留置場の奥に並ぶ四つの扉と突き当りの扉が取調室になっている。そのいちばん奥の部屋へ、栄子は押し込まれた。

(: : : ! !)

その場で、栄子は立ちすくんだ。

目の前に、母がいた。一糸まとわぬ素裸で後ろ手に縛られているばかりか胸にも腰にも菱形に縄を掛けられて——垂直に立てた木の板を跨がされていた。

跨ぐと形容してよいものか。

折り曲げて片脚ずつ縛られた膝は宙に浮いていた。膝からはコンクリートブロックがぶらさがっている。つまり峰子は、自分の体重に加えて二つ分のコンクリートブロックの重量までを、股間で支えていることになる。

木の板は、股が裂けたのではないかと思うほど、深々と無毛の秘裂に食い込んでいた。荒縄で締め上げられるのと、どちらが痛いのだらう——と、栄子は戦慄した。

峰子は峰子で、我が娘が裸も同然の姿で縄を掛けられていることに衝撃を受けていた。

「まさか……その格好で連れて来たのではないでしょうね？」

峰子の引き攣った顔は、すでに答えを察している。――
「禪一本で往来を闊歩してもかまわんと、所轄の交番からお墨付きが出ています」

栄子は唇を噛んでうなだれている。目を上げれば、母の痛ましい姿を見てしまう。そして、こんな恥ずかしい姿で、どうして母と目を合わせられよう。

「約束が違います！」

峰子が叫んだ。

「娘には手を出さないと言うから、ありもしない罪を認めたのに……嘘だったのですね」

（え……？）

栄子は顔を上げて、すぐに目を伏せた。罪を認めたと、母は言った。それも……わたしが脅しに使われたらしい。母から目をそらせたときなんて卑劣な――という怒りと同時に。母から目をそらせたとき

栄子は、板から滴り落ちる鮮血に気づいていた。荒縄より、よほどひどい拷問なのだ。でも……罪を認めただのに、まだ拷問するなんて、どういうことだろう。

「白白しなければ、おまえの常日頃を娘に問い質すと言っただけだ。おまえがスパイと決まったからには、誰か手助けをした者がいるはずだ。その一番の容疑者は、こいつということになる」

沼野は腰縄をつかんで、栄子を母の目の前に引き寄せた。

「あ……！」

ちいさく叫んだのは、栄子だった。

母が跨がされているのは、平らな板の縁ではなかった。厚さ二センチほどのベニヤ板は両側から削られて、縁が鋭角に尖っていた。股が裂けて当然だった。

栄子が驚いたのは、それだけではなかった。無毛にされた母の下腹部には、いくつもの赤黒い小さなくぼみが穿たれていた。煙草の火で淫毛を焼かれ、そればかりか肌に押しつけられたのだ。

「おまえにも、じきに座り心地を味わわせてやる。だが、本格的な取り調べは明日からということにして……」
沼野は峰子を振り返った。ついでといった感じで、乳首を指で弾いた。

「ひっ……！」

峰子が小さな悲鳴をあげた。

「ひ……」

栄子も息を飲んだ。下半身にばかり目が行って、それまで気づかなかつたのだが。

軽い悪戯に（としか、今の栄子の眼には映らない）痛みを訴えたのも道理。母の乳首は太い注射針で十文字に貫かれていた。まわりには乾いた血がこびり付いている。

「な、な、なんて……」

歯がカチカチ鳴って、栄子の声は言葉にならない。

「今日のところは、おまえが学校で何を習っていたか、母親に見せ

てやろうじゃないか」

沼野は、ひと呼吸で栄子の縄をほどいた。

「取調室には布団なんて洒落た物はないが、どうせ莫塵一枚で客を取っていたのだから、かまわんよな？」

母のむごたらしい姿に目も心も奪われていた栄子だったが、沼野の言葉の意味はすぐにわかった。

「厭です！ どうして、そんなことをしなくちやならないんですか」
栄子は両手で前を隠して後じさった。

「ちやんと学校で勉強していますと、母親を安心させてやれ」

残酷に唇をゆがめる沼野。目は、淫虐の欲望にぎらついている。

栄子は、自分から両手をおろした。

「わかりました。でも、ここではないやです。せめて、母の居ない場所にしてください」

相手は男が三人。抗ったところで、力づくで犯される。

しかし栄子の譲歩は、相手に通じなかった。

「吊り場へ引つ立てろ」

沼野に命令されて、二人の巡査が両脇から栄子の腕をとった。

栄子は逆らわない。逆らっても無駄だということをし、この三週間でさんざん学んでいる。

部屋の角から一メートルほどのところに、上から縄が何本か垂れていた。天井板を剥して梁に掛けてあるのだった。

別の縄で手首を前で縛られてから、栄子はその縄に結ばれた。

巡査が二人ががりて反対側の縄を引くと、栄子の手首が上に引っ

張られる。腕が真上に伸びて、手首に体重の一部が掛かったところ

で、縄尻が手首にきつく結ばれた。

「もう一度だけ聞かず。学校で受けている教育を、母親の目の前で

実演するのは、どうしても厭か？」

「あたりまえです！」

「氣力を振るって、栄子は相手をにらみつけた。

「そうか」

沼野がズボンをゆるめて、禪を引つ張り出した。
「やめてください！」

峰子が悲鳴混じりの声をあげた。

「栄子、その人に逆らっては駄目。言われたとおりにしなさい」

栄子は口をとぎしたまま、大きくかぶりを振った。沼野の意図はわかっている。林と同じように、禪で猿轡を噛ませるつもりなのだ。

沼野は林よりも手間をかけて、禪で大きな結び玉を作った。それを栄子の口に近づけて。

「口を開けろ」

栄子は沼野をにらんで、口を固くとぎしている。逆らうすべを持たないから、何をされても受け容れるしかない。けれど、自分から進んで相手の命令に従ったりはしない。それが心の純潔だと、栄子は思う。

（母様みたいな目に遭わされても？）

きつと屈服すると思う。それでも、耐えられるだけは耐えてみせ

る。

しかし沼野は、重ねての残虐を栄子に振るおうとはしなかった。禪を床に投げ捨て、取調机の上に置かれた救急箱から新しい注射針を取り上げて、峰子に近づいた。女には敏感な突起が三か所あるな。まだ一か所だけは手つかずだった。

峰子は唇をわななかせて、しかし赦しを乞おうとはしない。彼女も娘と同様に、嘆願の無意味さを思い知っている。淫核に針を刺される激痛を、栄子は想像すらできない。しかし、つねられたり荒縄の毛羽にこすられる痛さなんかとは比べものにならないことくらいはわかる。やめてください！言われたとおりにします。これ以上は母を虐めないでください。栄子は口をいっぱいに開けて、そのままにした。ふん。手間をかけさせやがる。

沼野は注射針を元に戻して、床の禪を拾いあげた。汚れをぬぐわず、そのまま栄子の口に突っ込んだ。幅一尺長さ三尺の布を全部押し込んで、紐で頬をくびる。

「んんん……」

栄子は、完全に言葉を、そして悲鳴も封じられた。

沼野は足元にしゃがんで、天井から垂れている別の縄で栄子の左足首を縛った。縄尻を引いて栄子の足を宙に浮かして横へ開かせてから結び留めた。

禪に包まれた股間が剥き出しになった。

その、羞恥の源を包んでいる布を、沼野はあっさりとほどいてしまった。剃毛でつるつるになった肌にはぱっくりと開いた割れ目が、男たちの目に晒された。

「半分白人なだけに、色が薄いな。珊瑚色とか薄鮭色とか、うまそうな色をしている。おまえたちは、どう思う？」

沼野は二人の巡査にも股間を覗き込ませた。

栄子は観念して、じつとしている。恥ずかしいけれど、それだけのことだった。

「とても、何十人もの男を相手にした淫売の持ち物とは思えません」
「なんですって……!？」

峰子が悲鳴混じりに叫んだ。

「娘が……淫売ですって？」

「ふふん。そういうことだ。こいつは、淫売になるための手ほどきを学校で受けて、この十日ばかりは実地教育も受けている。おまえよりは、よほど男を啜え込んでいるぞ」

沼野が、峰子の知りたいことを丁寧に説明してやった。

「なんてことを……わたしだけでは気がすまずに、娘まで毒牙にかけたのですか。デーモン! トイフェル! イツヒヴェルテドイツヒ フェアフルーヘン!」

「さっぱりわからんな。なににせよ、俺に悪態をついても始まらないぞ。こいつの指導をしたのは、教頭の林だ。ほかの先生方も手伝っ

たそうだがな」

沼野は、まだ手に持っていた栄子の禪を、あらためて検分した。

「ほう、こりゃあいい」

結び玉を芯にしてさらに大きな結び玉を作り、それで峰子にも猿轡を噛ませた。

「さて：：母親にもばれてしまったな。素直に商売を始める気になつたかな？」

がくつと、栄子はうなだれた。ただ知られるのと、実際に見せつけるのでは雲泥の差がある。けれど：：拒否すれば、母に注射針が突き刺さるのだろう。

栄子は弱々しくうなずいた。

ところが、沼野は。

「俺たちを相手に股を開く気があるのか、ないのか？ はつきり答

えろ」

「んんん、んんん！」

栄子は何度も首を縦に振った。

「俺を馬鹿にしているのか。まともに返事をしろ」

出来っこないことを要求する沼野。

「ここは取調室だからな。容疑者の人権に配慮して、鞭とか木刀とか焼き鑊とか、そういった拷問の道具は一切置いていない」
うそぶきながら、沼野はベルトをズボンから抜き取った。

「だから、たいしたことはできない」

ベルトを栄子の眼の前にかざして、じっくりと見せつけた。幅は三センチくらいと細身だが、五ミリ以上の厚さがあった。狭い面積に強い打撃が集中する。

「淫売の真似事をしたくなったら、いつでもそう言えよ」

沼野はベルトの金具を握って、栄子との間合いを取った。

（この人……なにがなんでも、わたしを拷問にかけるつもりなんだ）
拷問とは、何事かを自白させるために容疑者を痛めつけることだから、この場合には当てはまらない。しかし、栄子の確信そのもの

は間違っていたいかなかった。

「そらよっ……！」

掛け声とともに、垂れていたベルトが斜めに跳ね上がる。

びしっ……！

股間をベルトが下から上へえぐった。林に教鞭で叩かれたときよりも、ずっと重たい激痛だった。

「んびいっ……！」

股間を打ちすえられて、栄子は反射的に腰を引いた。右足が床から浮いて、肩の関節がグキッと鳴った。

「ふう、ふう……！」

栄子の足が床に着くのを待って、沼野が二発目を打ち込んだ。

「んんっ……！」

もがけばもがくだけ自分を痛めつけることになる。頭ではわかつていて、今度は半回転した。再び栄子の身体が宙に浮いて、今度は半回転した。

沼野が半歩踏み込んでベルトを振るった。
びしいっ……！

大きく割り開かれた尻の谷間にベルトが食い込んで肛門を叩き、
反動で曲がった先端が淫核を直撃した。

「ぶばああっ……！」

嚴重な猿轡を押し破って、栄子の口から絶叫が漏れた。

身体が逆向きに回って沼野に正対した。

「面白い娘だ。自分から独楽回しを催促しやがる」

沼野が黄色い歯を剥き出して、巡査に嗤いかけた。

「はあ、そうですね」

沼野の残虐に辟易している返事。しかし、二人の目も上司に劣ら

ずぎらついている。

沼野がベルトを振り上げた。

びしいっ！

ベルトは吊り上げられている左の内腿に当たった。びくつと栄子

は脚を引いたが、声は洩らさなかつた。股間への痛撃に比べれば、痛いとい形容するのものはかられる。もちろん、栄子以外の少女なら、泣き叫んでいただろうけれど。

びしっ、びしっ、びしっ、びしっ、びしっ……と、栄子は立て続けに内腿ばかりを叩かれた。ベルトからのがれようとして、自然と身体が左へ回っていく。それを沼野が追いかける。

「んんっ……？」

一回転もすると、栄子の右足は床からはなれていた。腕を吊っている縄と足を吊っている縄の間隔は開いている。それを無理によじるのだから、だんだんと縄が短くなっていく。

沼野は左足首に狙いを変えた。身体の高さから、軸からもっとも遠い部分を叩くのだから、（沼野と二人の巡査にとっては一面白いように栄子の身体が回転する。まさしく独楽回しだった。）

沼野の手が止まった。縄のよじれが戻ろうとして、栄子の身体が反対向きに回り始めた。

栄子の視界が右から左へ流れていく。気分が悪くなつて、栄子は目を閉じた。そこへ。

びしいっ！ と、ベルトが叩き込まれた。腋の下だった。

「んんっ……！？」

目を開けた栄子の視界に、ベルトを水平に構えた沼野の姿が映り、すぐに左へ流れ去った。

びしいっ！ 背中を叩かれた。

びしいっ！ ぱしん！ びしやあっ！

下腹部、脇腹、尻。胸を叩かれたとき、ずっと乳房のあいだに吊るしていた屈辱の木札が、紐を切られて壁まで飛んだ。

沼野はベルトの高さに変化をつけているだけで、どこに当たるかは回転している栄子の身体の向き次第なのだった。

十発ほども叩かれたところ、栄子の足が床に触れた。片足でたたらを踏むというのでも奇妙な表現だが。栄子はよろめきながら、身体の回転を止めた。

沼野がベルトを左手に持ち替えて栄子の前に立った。栄子の頬を縊っている紐を片手で器用にほどいて、ずるずると越中禪の布を引きずり出した。

「よーく考えてから、ものを言えよ」

ベルトの金具で、栄子の乳房を引っ掻いた。

考えるまでもなかった。林がもつとも悦んだのは、これ以上はな

いほどにへりくだって屈辱的な仕打ちをみずから願ひ出たときだ。

沼野もその同類だと、栄子は確信している。

「：：学校で教わったとおりに、淫売の真似事をするところを、母

に見てもらいます。どうか、刑事さんたちも協力してください」

嗚咽混じりの声を絞り出す栄子の眼には大粒の涙があふれていた。

心の純潔だけは護ると自分に誓っておきながら、こんなにもあつ

さりと屈服した自分が情けなかった。

栄子は床に降ろされて、手首の拘束も解かれた。

「もうじき昼休みだ。授業参観は午後からにするか」

沼野は二人の巡査をうながして、取調室から出て行こうとした。床にへたり込んでいた栄子が、あわてて沼野の背中に声をかける。

「待ってください。母も降ろしてやってください」

沼野が足を止めて振り返ったが、薄嗤いを浮かべている。

「ひと晩じゆう乗せておいても、けろりとしている玉だ。今日は、まだ三時間だけだ」

「……！」

三時間！ 栄子がそんなに長く続けて虐められたのは（輪姦を別にすれば）、頭にバケツを乗せて全裸で立たされたときだけだ。

「言っておくが、勝手な真似はするなよ」

沼野が引き返してきた。

「これも、これも……」

乳首を十文字に刺している注射針をこねくり、膝から吊るされているブロックを蹴って、峰子にくぐもった悲鳴をあげさせた。

「そのままだぞ。勝手な真似をしたら、針も錘も二倍にして夜まで

だ

「忘れていたとつぶやいて。沼野は峰子の猿轡もはずした。久しぶりの親子対面だ。たつぷりと語り合うことだな」
最後に腹を殴りつけて——その直接の痛みよりも、身体を揺すぶられて秘裂に尖った稜線がさらに食い込んだ激痛で——峰子を絶叫させてから、沼野は部屋を出て行った。

「母様：：だいじょうぶ？」

「だいじょうぶなはずがなくても、そう問いかけるくらいしか栄子には思いつかない。我慢するしかないのです」

「そんな：：」

栄子は鞭打たれた痛みをこらえて、母のもとへ這い寄った。栄子の両手は自由だ。けれど、注射針を抜くこともコンクリートブロックを下ろすことも禁じられている。いや、ひとつだけあった。

ベニヤ板は長さが二メートルほど、高さは栄子の臍を越えていた。

両端と中央の三か所を三角形の板が支えている。

栄子は、ベニヤ板の陰に隠れるように正座して、膝の上にコンクリートブロックを載せた。

「やめなさい。見つかったら、あなたまでひどいことをされるのよ」
「見つからないわよ。ドアが開きかけたら、すぐ逃げるから」
「そう？　でも、たいして痛みは減らないから、やめておきなさい。
気持ちだけでじゅうぶんよ」

言葉の半分は、その通りだろう。峰子の体重が五十キログラム、コンクリートブロックひとつが十キログラムとすれば、七分の一しか負担は減らない。ほんの三十分かそこら、自分がわずかに楽になるためだけに、娘に危険を冒させられないという想いが、残りの半分だろう。

「こんなのは……あいつらにとっては、遊びも同然なのだから」
峰子がささやくように言った。

「あいつらが本気で——絶対に自白させようとするときは、こんな

ものではありません」

母の受けている拷問は、すでに栄子の想像を超えている。それ以上上の拷問があるなんて、信じられない思いだった。

「お裁縫のとき、爪の下に針を刺してしまったことがあるでしょう？　畳針を突き通されて、マツチで炙られたりするのでしょぞくつと、背中一面が粟立った。ガラスを引っ搔くキイキイいう音に感じる生理的な不快感を何万倍もおぞましくした——恐怖だった。」

「針を突き立てると脅したところを、ギザギザの嘴で咬まれて、電気を流されたこともありませす」

「やめてっ……！」

栄子は耳を両手で押さえ、きつく目を閉じた。

「そんなひどいことを三週間もされてたなんて……信じられない！」
「毎日ではないのよ。取り調べは、せいぜい一日おきだし、ほんとうにひどい拷問は、これまでに三回だけでした」

傷が癒えるまでは拷問を手控えるし、沼野だっていくつもの事件を掛け持ちしている。

「三回……！ それじゃ、母様は……こんなひどいことをされても、耐え抜いたの？」

信じられない思いだった。

「あたりまえです」

峰子が、毅然と顔を上げた。

「わたしが罪を認めれば、夫の名誉を穢すことになります。それだ

けは、絶対にできません。でも……」

峰子の言葉が途切れた。

「ても……あなたまで拷問にかけると脅されて……それなのに……」

峰子は痛恨の面持ちで虚空を見据えた。それから、まだ膝の上にコンクリートブロックを載せている愛娘の目を覗き込んで。

「真実を貫こうとしても無駄なのです。だから、あなたは――罪を

認めなさい。嘘の自白をするのです」

「厭よ」

栄子は何年かぶりに、母の言葉に真っ向から逆らった。

「母様は耐えたのでしょ。わたしだって耐えます。ありもしない罪を認めたりしません」

「わたしは、あなたを拷問にかけると脅されて、負けました。あなたも……わたしに針を突き刺すと脅されて、沼野に従ったでしょう」

「……」

もしも。母が今よりもひどい、聞かされただけで身の毛もよだつ拷問にかけられようとしたら……。

「……わかったわ」

栄子はコンクリートブロックをぼんやりと見ろして、力なくつぶやいた。

栄子は、絶望のどん底で——もがく気力すら、すでになかった。これまでは、母さえ戻ってくればという思いが、栄子を支えていた。無実が証明されれば、母は非国民どころか、名誉の戦死を遂げ

た海軍大佐の未亡人なのだ。そして、自分はふたりの娘なのだ。伯父も林も小島議員も二人の巡査たちも、土下座させて謝らせてやる——とまでは、できないかもしれないが。母が逮捕された五月十日から今日までは、暦の上から消え去るのではないか。そんなふうに思う——いや願って、だから家出も自死もせず、屈辱を耐えてきた。

けれども。母が無実の罪を認めてしまい、自分も濡れ衣を着なければならぬ。

自分と母は、これからどんなふう扱われるのか——林や伯父や、何十人も男たちに弄ばれてきた栄子には、およその想像がつくのだった。

そして。それくらいなら舌を噛み切ってやろうという気概と矜持とは——この取調室のどこかに打ち捨てられて、二度と栄子の心には戻ってこないのだった。